館蔵名品展

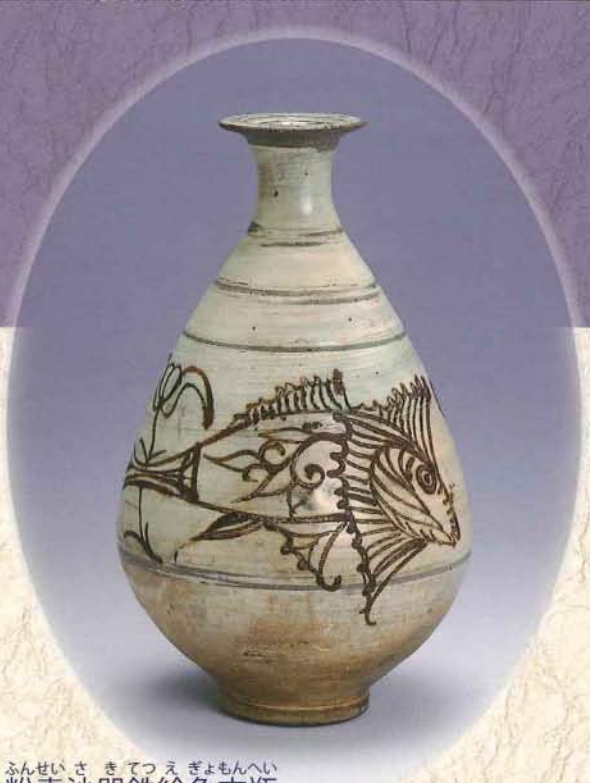
会 期：平成19年6月8日(金)～7月8日(日)
主 催：佐賀県立名護屋城博物館

名護屋城博物館では、メインテーマ「日本列島と朝鮮半島との交流史」や城郭史、唐津・東松浦地域の歴史・文化、韓国の歴史・文化などに関する資料を収集し、調査研究、展示紹介に努めています。

今回の展覧会では、館蔵資料のうち歴史的・美術史的に価値の高い資料の中から厳選した「名品選Ⅰ」と、合わせて平成18年度に購入・寄贈・寄託・複製品作成により収集した新収蔵資料を御紹介します。

今回展示している名品は、展覧会への出品要請や出版物への写真掲載要請なども多く、全国的にも歴史的・美術史的に価値が高い資料として知られています。

名品の数々をごゆっくり御堪能ください。



16 粉青沙器鉄絵魚文瓶（ふんせいさきてつえぎょもんへい）

鶏龍山古窯　朝鮮時代前期(15～16世紀)
高さ27.4㎝、底径7.2㎝、最大径16.5㎝

粉青沙器は朝鮮時代前期の代表的な陶器で、唐津焼をはじめ日本の陶磁器の発展に大きな影響を与えた。忠清南道の鶏龍山古窯は粉青沙器を多産した。本資料は、鉄絵で魚文が描かれた優品。

1 鳥形土器（とりがたどき）

三国時代　3～4世紀　高さ(大)28.8㎝

水鳥をかたどった土器で、4世紀ごろ朝鮮半島南東部にあった加耶とその周辺で用いられた。一対で儀式や死者の副葬品として用いられたと考えられる。朝鮮半島南東部では、鳥は死者の魂を霊界に運ぶものと考えられていたと『魏書』東夷伝に記されており、鳥形土器はそのような思想の反映と思われる。

9 豊臣秀吉画像（とよとみひでよしがぞう）

17世紀初頭　掛幅・絹本 36.4㎝×24.0㎝(本紙)

秀吉の画像は、主に没(1598年)後から江戸時代初期にかけて、恩顧の大名や寺社により礼拝用として盛んに制作された。本資料もその1つで、京都高台寺・逸翁美術館・京都新日吉神社蔵などの構図と類似するが、極めて小振りであるのが特徴である。そのことから、豊臣家恩顧の家に伝わり、持仏堂などで掛けられていたものと思われる。

本資料の明治期(1868～1911)の所蔵者福井貞憲(恒斎)の箱書には「作者は狩野山楽、施薬院全宗(秀吉侍医)旧蔵」とあるが、作者は他の狩野派や長谷川派の可能性もあると考えられている。

2 金製垂飾

三国時代　5～6世紀　長さ(大)22.3㎝

朝鮮半島の三国時代から統一新羅時代にかけて盛んに製作された王族などの装身具。アクセサリーとして耳や冠などに装着し、一般民衆に威信を示す役割を持っていた。九州から西日本にかけて同様な金製垂飾が古墳から出土しており、当時の交流を物語っている。

5 豊臣秀吉朱印状(高麗国禁制)

天正20(1592)年正月日付

一紙・掛幅装　45.5㎝×65.0㎝

秀吉は、天正20(1592)年正月、諸大名に対して３月１日から天候次第で朝鮮半島に渡海するよう命じた。本史料は、同月、秀吉が大名に出した「禁制」で、「高麗国」(朝鮮国)における乱暴狼藉、放火、庶民に対する不法行為の３ヶ条を禁止したもの。秀吉は朝鮮国を支配することを国内の領土拡大と同様に考えていたことが読み取れる。

4 豊臣秀吉朱印状（刀狩令）

天正16(1588)年7月日付

継紙・掛幅装　80.8㎝×64.0㎝(本紙)

本紙縦寸法：上41.3㎝・下39.5㎝

一揆防止のため農民の武具の所持を禁止した３ヶ条からなる秀吉の「刀狩令」。近年では、その武具が「唐入り」にも利用されたことがわかっている。

本史料は、本来は、大高檀紙を２枚継いだものだが、後世に二分され、上下に表装されている。

3 文官夫妻像

朝鮮時代初期(15世紀ごろ)カ

掛幅・絹本　158.5㎝×96.5㎝(本紙)

朝鮮時代の王宮や両班階級で影堂に奉安するために描かれた「影幀」と呼ばれる祖先の肖像画。一般的には左右のどちらかを向いているものが多いが、この夫妻像はともに正面向きに描かれている。

像主は不明だが、無紋朱色の団領、２羽の鸞を刺繍した胸背、頭の紗帽から、朝鮮王朝の高位の文官であることがわかる。

作者不詳だが、高い写実力から図画署の画員であろうと思われる。

8 鷹羽文鬼瓦

桃山時代　名護屋城跡三ノ丸出土　残存高61.1㎝

鷹の羽根あるいは芭蕉や蘇鉄などの植物の葉とおぼしきレリーフを１つだけ大胆にデザインしている。吉祥文と考えられる。

レリーフの右上に「はかた(博多)」「左衛門」とヘラ書きされており、博多の瓦職人の手になるものと考えられる。

6 生駒讃岐守宛豊臣秀吉朱印状(條々)　慶長２(1597)年２月21日付　継紙・巻子装　45.7㎝×234.2㎝(本紙)

第２次朝鮮侵略(慶長の役)の開始にあたって定められた軍令で、本史料は生駒讃岐守(一正)宛。戦いの先手は加藤主計頭(清正)と小西摂津守(行長)とが籤によって２日交替で務めよと命じる第１条に始まり、３番隊から８番隊までの各大名の名、朝鮮半島南部に築いた「倭城」の在番衆、軍目付(いくさめつけ)による戦況報告と論功行賞など、さまざまな事項についての指示が細かく記され、全体で21ヶ条に及ぶ。

7 加藤清正画像

茂呂金朝筆　江戸時代後期

掛幅・絹本

78.5cm×32.2cm(本紙)

茂呂金朝は江戸時代後期の狩野派の絵師。

10 朝鮮使節騎馬図

宮川長春筆　江戸時代中期

掛幅・絹本　125.0cm×40.0cm(本紙)

宮川長春(1682～1752)は、美人画を得意とした肉筆の浮世絵師。通信使随員の休息の一こまを活写したユニークな風俗画。

14 青磁象嵌荔枝文鉢

高麗時代 12～13世紀　高さ 6.0cm、口径18.6cm

鉢の内面、口縁部近くに細い唐草文帯、その下の内側面5ヶ所に荔枝文、見込みに花文をすべて白象嵌で施文している。

15 粉青沙器鉄絵人参葉文俵壺

朝鮮時代 15～16世紀　高さ20.0cm、長径26.6cm

俵形の重厚な器形に、朝鮮人参とされる三つ葉文を鉄絵で描いた粉青沙器の優品。

18 螺鈿牡丹唐草文机

朝鮮時代中期(16～17世紀)　45.0cm×85.0cm×28.5cm

天板は赤漆、側面は黒漆塗りの机。全体に布着せし、漆を塗る極めて質の高い作品。天板には細かい金属縒線により型枠をつくり、枠外周囲には金属縒線で輪郭をかたどった双龍を表す。朝鮮時代には珍しい厚めの夜光貝を使用している。昨年、韓国国立中央博物館の「燦爛なる千年の光、螺鈿漆器」展に出品。

17 三島唐津象嵌耳付水指

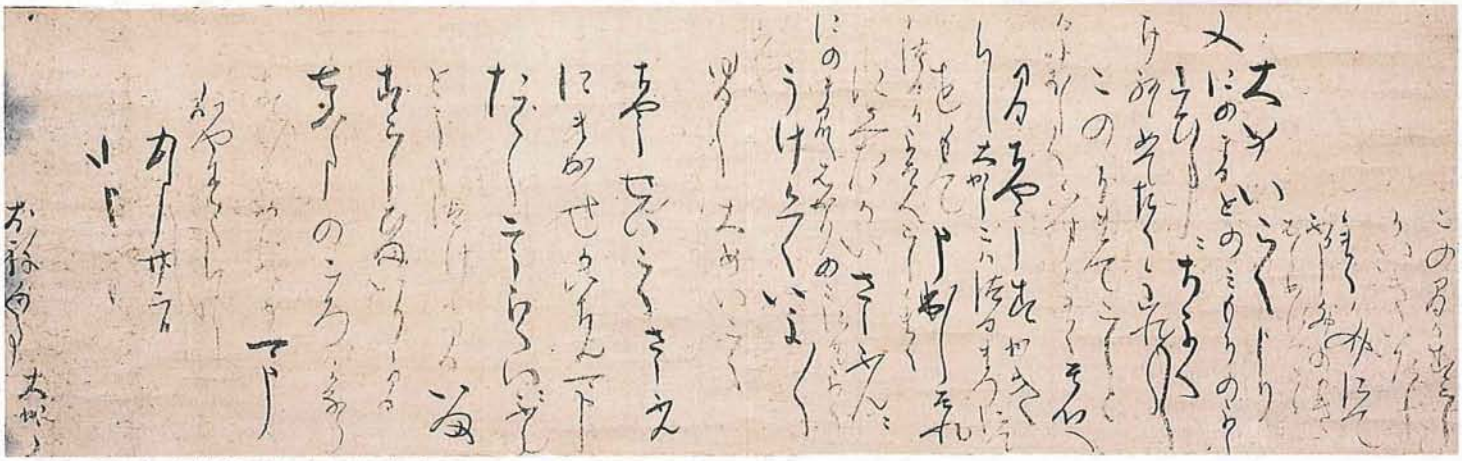
大草野窯(現嬉野市塩田町)　江戸時代初期(17世紀前半)

高さ18.8cm、口径13.5cm、底径11.1cm、最大径19.4cm

大草野窯で焼かれた典型的な「武雄系三島唐津象嵌耳付水指」。暦手文・菊花文・渦巻文・沈線等の象嵌が施されている。粉青沙器象嵌技術を唐津焼に伝えた最初期のもの。

13 朝鮮通信使行列絵巻【正使・副使・従事官部分】 狩野常信筆　宝永元～3(1704～06)年ごろ カ　巻子　32.5cm×780.5cm

巻末に「法眼古川叟筆〈印〉」とあることから、幕府絵師狩野常信(1636～1713)の宝永元～3(1704～06)年頃の作品で、天和2(1682)年の通信使を描いたものと推定される。行列には、正使・副使・従事官の三使、軍官・楽員等の随行者、清道旗・形名旗・巡視旗・令旗等の旗、一行の随行・警備に当たった対馬藩士などが描かれている。また、国書輿が有り、対馬藩士が裸足であることから、江戸への往路で、京都・江戸等の市街地を進む行列の様子であると考えられる。天和度通信使一行は475人であったが、本資料には107人描かれ、対馬藩士等の日本人は136人描かれている。

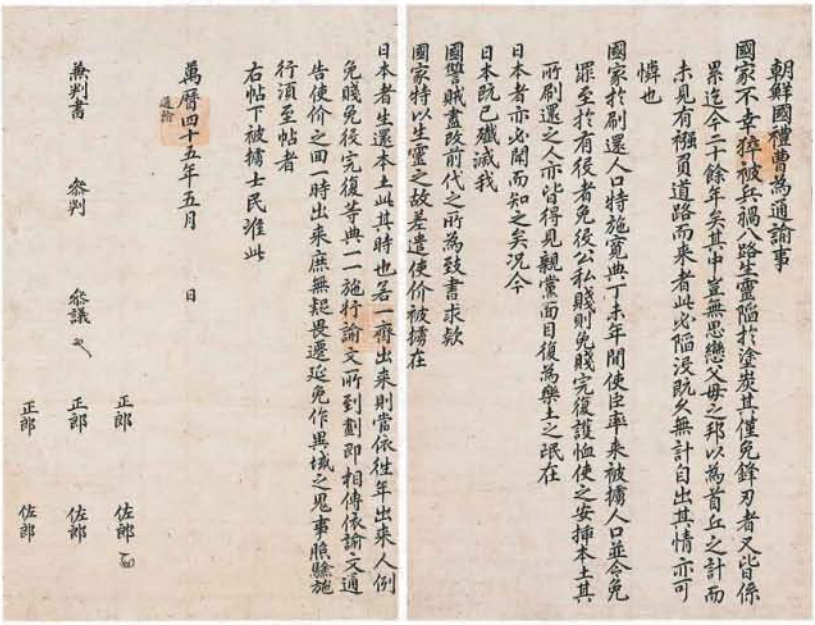


11 北政所宛豊臣秀吉自筆書状（きたのまんどころあてとよとみひでよしじひつしょじょう）

〔文禄２(1593)年〕５月22日付　一紙２枚１通・掛幅装　28.0cm×90.5cm(本紙)　重要美術品

豊臣秀吉は、文禄元～２(1592～93)年に合わせて約12ヶ月半、肥前名護屋に滞在した。その間に秀吉が書いた自筆の書状(「消息(しょうそく)」)は、現在12通確認されている。その内の８通が正室北政所(おね)あてで、この手紙は、文禄２年５月22日付のものである。発信日７日前の15日には謝用梓・徐一貫らを代表とする明国講和団が名護屋に到着しており、23日に秀吉と両使が会談したが、この手紙はその前日に書かれたものである。

明国使節を、秀吉は「わび事(謝罪)」のための「ちよくし(勅使)」と誤認しており、朝鮮国南半割譲など７ヶ条の和議条件案を受諾すれば、「いよゝゝゆるし」戦いを終わらせて凱旋すると言っている。また、「こうらい(高麗)にふしんとう(普請等)申しつけ」と、倭城築城を命じているので帰坂が遅れると言っている。追而書(追伸)部分には、「かいき(咳気)」の快復後初めて出す手紙であると北政所にごまをすり、「にのまるとの(淀殿)」の懐妊に際して北政所の複雑な心情を慮る言葉が書かれている。「人たらし」と言われた秀吉の人間味がにじみ出ている。



朝鮮國禮曹爲通諭事
國家不幸猝被兵禍八路生靈陷於塗炭其僅免鋒刃者又皆係
累迄今二十餘年矣其中豈無思戀父母之邦以爲首丘之計而
未見有極貢道路而來者此必陷沒既久無計自出其情亦可
憐也
國家於刷還人口特施寛典丁未年間使臣率來被擄人口並令免
罪至於有役者免役公私賤則免賤完復護恤使之安挿本土其
所刷還之人亦皆得見親黨面目復爲樂土之氓在
日本者亦必聞而知之矣況今
日本既已殲滅我
國讐賊盡改前代之所爲致書求款
國家特以生靈之故差遣使价被擄在
日本者生還本土此其時也若一齊出來則當依往年出來人例
免賤免役完復等典一一施行諭文所到劃即相傳依諭文通
告使价之回一時出來庶無起畏遷延免作異域之鬼事照驗施
行須至帖者
右帖下被擄士民准此

萬曆四十五年五月　日

兼判書　正郎　佐郎

參判　參議　正郎　佐郎

12 朝鮮国礼曹俘虜刷還諭告文（ちょうせんこくれいそうふりょさっかんゆこくぶん）

万暦45(光海君９・元和３・1617)年５月日付
継紙・掛幅２幅装　各101.7cm×66.1cm(本紙)

文禄・慶長の役の際に、多くの朝鮮国の人々が日本軍の捕虜として連行され、朝鮮国は戦後復興の面でも大きな痛手を受けた。本史料は、朝鮮国の礼曹(礼楽・祭祀・外交・学校・科挙等を職掌する機関)から日本国内に連行された朝鮮国の人々に対して発せられたもので、元和3(1617)年の回答兼刷還使が持参した。

慶長12(宣祖40・1607)年の回答兼刷還使の際に帰国した人々(約1,240人)の処遇を述べ、帰国者には前例にならって特典を与えるので、互いにこの諭告を伝えて帰国するよう呼びかけている。

19 戦国武将旗指物馬印屏風（せんごくぶしょうはたさしものうまじるしびょうぶ）

作者不詳　江戸時代前期 六曲一双　各176.0cm×380.0cm

旗指物とは、戦場おいて敵味方の見極めや自分の存在・活躍を知らしめることを目的として掲げた旗印・馬印・大型の母衣などの総称。旗指物は、源平合戦の頃から用いられるようになったといわれ、合戦が盛んに行われた戦国時代には各大名や武将が、自己顕示のため各自趣向をこらした奇抜なものを盛んに製作するようになった。

この「戦国武将旗指物馬印屏風」には、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康・鍋島直茂など、戦国時代から江戸時代前期かけての大名・武将126家の旗指物が金地の上に色鮮やかに描かれている。

21 肥前名護屋城図屏風【佐賀県指定重要文化財】

伝狩野光信筆 桃山時代 6曲1隻 157.0㎝×350.0㎝

文禄・慶長の役(壬辰倭乱・丁酉再乱/1592～98)当時の名護屋城と周囲の城下町や陣屋の状況を、名護屋浦の北側に浮かぶ加部島(佐賀県唐津市呼子町)の方向から描いたものである。第５扇中央の行列が、文禄２(1593)年５月15日に名護屋に上陸した明国講和団(謝用梓・徐一貫ら)一行と思われることから、この絵図の景観年代は文禄２年夏頃と考えられている。

城下には、西洋人(ポルトガル人カ)や道端で遊ぶ子どもたち、振売など名護屋に集まった様々な人々の姿、軒を連ねる店棚の様子など詳細に描かれており、当時の名護屋の風俗が見て取れる。また、名護屋城の内部構造や城下の街並み、陣屋の配置、海岸線などの描写は、現在の名護屋一帯の地形や道筋と比較することができる。

現在、名護屋城跡の周りには、130余りの諸大名の陣跡が半径３㎞の範囲内に確認されており、その中の名護屋城跡と徳川家康本陣跡・同別陣跡・前田利家陣跡など23の陣跡が国の特別史跡に指定されている。この広大な遺跡群は、本館と唐津市・玄海町が中心となって発掘調査・環境整備・石垣修理などの保存整備事業を進めており、その際にもこの「肥前名護屋城図屏風」が基本資料となっている。

【新収】木造菩薩坐像

朝鮮時代初期(15世紀)カ 寄木造 像高41.0㎝、幅27.0㎝

左手を胸前に挙げ、右手を膝上に差し伸べて座する菩薩像。材質は広葉樹と考えられ、全体は漆塗りで金箔も良好に残るほか、頭髪も漆塗りで表現している。頭部には漆紙作りの宝冠を戴いている。やや前屈みの姿勢や、大頭短首で幼少化された表情、法衣の表現の簡素化や装飾品の省略などから、数少ない朝鮮時代初期の木造仏と推定される。宝冠が遺存している例としても極めて稀。

20 洪浩然詩書屏風「曲巷」云々

洪浩然筆 江戸時代初期(17世紀前半)
6曲1隻 166.0㎝×380.0㎝

洪浩然(1582?～1657)は、文禄の役(壬辰倭乱)の際に、慶尚南道晋州で鍋島直茂軍に捕らえられ、佐賀に連行された。その後直茂・勝茂父子に仕え、書家・儒者として大成した。

この詩書屏風は、唐の詩人李白の五言律詩「宴陶家亮子」「姑熟渓」の２編を書いたものである。洪浩然は「こぶ浩然」と言われるように独特の書体であるが、その特徴がよく表れている。

【新収】肥前国小河嶋鯨場絵図

江戸時代後期 嘉永２(1849)年以前
絵図１舗･掛幅装 78.7㎝×190.5㎝(本紙)

小川島(現唐津市呼子町)漁場での網掛突取捕鯨の様子を描いた絵図。小川島から加唐島(現唐津市鎮西町)にかけての範囲を南側から俯瞰した極めて稀な構図となっている。

加唐島の東側の網代で三重の網を張り、セミクジラ２頭を捕獲している場面、捕獲した鯨を船で小川島の納屋場へと運ぶ場面、納屋場で鯨を解体している場面を、景観の中に入れ込んで左から右へと描いている。

【展示資料一覧】

名品選Ⅰ

1 鳥形土器　2 金製垂飾　3 文官夫妻像　4 豊臣秀吉朱印状(刀狩令)
5 豊臣秀吉朱印状(高麗国禁制)　6 生駒讃岐守宛豊臣秀吉朱印状(條々)　7 加藤清正画像
8 鷹羽文鬼瓦(名護屋城跡三ノ丸出土)　9 豊臣秀吉画像〔6/8～24〕　10 朝鮮使節騎馬図〔6/26～7/8〕
11 北政所宛豊臣秀吉自筆書状　12 朝鮮国礼曹俘虜刷還諭告文　13 朝鮮通信使行列絵巻
14 青磁象嵌荔枝文鉢　15 粉青沙器鉄絵人参葉文俵壺　16 粉青沙器鉄絵魚文瓶
17 三島唐津象嵌耳付水指　18 螺鈿牡丹唐草文机　19 戦国武将旗指物馬印屏風〔6/8～14、19～7/8〕
20 洪浩然詩書屏風〔6/15～17〕　21 肥前名護屋城図屏風〔6/15～17〕

平成18年度新収蔵資料

購入	木造菩薩坐像	木像１躯	【図版掲載】
	(文禄元年)３月13日付豊臣秀吉朱印状案	一紙１通･巻子装	1592年 46.4㎝×307.8㎝(本紙)
	(文禄元年)12月18日付豊臣秀吉朱印状	折紙１通(切断)･掛幅装	1592年 44.4㎝×64.0㎝(本紙)
	慶長２年３月７日付石田三成等奉行連署掟書	一紙１通･巻子装	1597年 28.8㎝×113.4㎝(本紙)
	蒙古襲来絵詞(模本)	巻子２巻	江戸時代末期～明治初期 上巻37.8㎝×1278.0㎝ 下巻37.8㎝×1332.0㎝
	延享五年朝鮮人来朝書付	書冊１冊	1748年 41.5㎝×31.3㎝
	小川敬吉所持陸軍陸地測量部地形図	地形図310枚･周囲切断	1910～30年代 各38.5㎝×47.5㎝
	大阪毎日新聞社新撰訂刷　朝鮮交通全図	地図１舗	1910(明治43)年 109.3㎝×78.8㎝
	続撰清正記	書冊７冊	江戸時代前期 26.0㎝×18.0㎝
	大河内秀元朝鮮日記(写本)	書冊５冊	江戸時代 26.5㎝×18.5㎝
	肥前国小河嶋鯨場絵図	絵図１舗･掛幅装	【図版掲載】
	銃殺捕鯨日誌	書冊１冊	大正後期 23.9㎝×15.7㎝
	西遊旅譚	書冊５冊	寛政６(1794)年刊 各25.9㎝×17.5㎝
寄贈	日露清韓新地図 【古舘大生氏寄贈】	地図１舗	明治37(1904)年刊 78.7㎝×53.9㎝
	神代鍋島家文書「覚書いろいろ」 【鍋島保孝氏寄贈】	折本１冊	江戸時代初期カ 23.5㎝×125.3㎝
	朝鮮半島絵葉書･写真 【小山保雄氏寄贈】	葉書等27枚･写真11点	1920～45年 各14.2㎝×9.1㎝
	朝鮮半島記念絵葉書 【星野隆氏寄贈】	葉書50枚	1907～18年 各14.2㎝×9.1㎝
	鯨骨製三味線撥 【井手寿子氏寄贈】	三味線用撥1点	昭和期カ 20.2㎝×7.9㎝×2.4㎝
	中国銭貨 【和田倉末雄氏寄贈】	銅銭53点	初鋳621～1408年 径2.3～2.6㎝
	金箔鯱瓦(牙部分) 【太田護氏寄贈】	瓦１点	安土桃山時代 7.0㎝×2.0㎝×4.0㎝
	文字瓦 【太田護氏寄贈】	瓦１点	安土桃山時代 35.0㎝×8.0㎝×15.5㎝
	分銅 【太田護氏寄贈】	分銅１点	江戸時代 5.5㎝×2.7㎝×4.5㎝
	捕鯨砲用銛 【坂口久美子氏寄贈】	銛１点	昭和戦後期 152.0㎝×18.5㎝
	捕鯨砲用照準 【坂口久美子氏寄贈】	照準１点	昭和戦後期 120.0㎝×12.1㎝×13.5㎝
	土俵空穂 【江頭又助氏寄贈】	調度品１点	江戸時代末期 113.0㎝×42.0㎝×42.0㎝
複製	東照宮御影(四月十七日礼拝)	掛幅１幅	財団法人徳川記念財団原蔵
	三公集成　伝織田信長･豊臣秀吉･徳川家康筆	掛幅１幅	財団法人徳川記念財団原蔵
寄託	小川島捕鯨図屏風	６曲１双	江戸時代後期 森一鳳作 縦117.7㎝(本紙)

【附記】1 資料収集に御協力を賜りました井手寿子様、江頭又助様、太田護様、小山保雄様、川上トシ子様、財団法人徳川記念財団理事長徳川恒孝様、坂口久美子様、鍋島保孝様、古舘大生様、星野隆様、和田倉末雄様に厚くお礼申し上げます。
2 「名品選Ⅰ」の資料名に冠している数字は展示番号です。
3 この展覧会の企画及びこのパンフレットの編集は浦川和也が担当しました。また、パンフレットのデザインは川島須美男(デザイナー)が担当しました。

佐賀県立名護屋城博物館
Saga Prefectural Nagoya Castle Museum
〒847-0401 佐賀県唐津市鎮西町名護屋1931-3
TEL 0955-82-4905 FAX 0955-82-5664
(E-mail) nagoyajouhakubutsukan@pref.saga.lg.jp
ホームページ http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/nagoya/nagoyaindex.htm

●開館時間 9:00～18:00(入館は17:30まで)
●休 館 日 月曜日(休日の場合は翌日)及び年末
●観 覧 料 無料(特別企画展開催期間中を除く)

平成19年６月８日発行
編集･発行 佐賀県立名護屋城博物館
印　　刷 (株)三光

©2007 佐賀県立名護屋城博物館

環境保護のため再生紙を使用しています